

東日本大震災後のプレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレスとの関連

Period of residence in prefabricated temporary housing and psychological distress after the Great East Japan Earthquake: A longitudinal study

2018年 BMJ Open 発表

震災後のプレハブ型仮設住宅への入居期間が長い者ほど心理的ストレスが高い

東日本大震災後、被災地域では地震・津波により家屋が倒壊し、多くの住民がプレハブ型仮設住宅に転居し、そこでの生活が長期化することが大きな課題となっていました。これまでの研究では、プレハブ型仮設住宅居住者の心理的ストレスが高いことが報告されていました。しかし、プレハブ型仮設住宅からの転居・未転居が心理的ストレスに与える影響について、縦断研究での報告はありませんでした。

本研究は、東日本大震災後のプレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレスとの関連を縦断研究により検証したものであり、プレハブ型仮設住宅への入居期間が最も長い「4年以上の者（未転居）」で、心理的ストレスが高い者（K6得点：5点以上）が多いことが明らかとなりました（図1）。

また、震災直後の心理的ストレスが低い者（K6得点：4点以下）、高い者（K6得点：5点以上）に分けたとき、プレハブ型仮設住宅への入居期間が最も長い「4年以上の者（未転居）」で、心理的ストレスが悪化する者が多く（図2）、改善する者が少ない（図3）ことが明らかとなりました。

図1 プレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレス

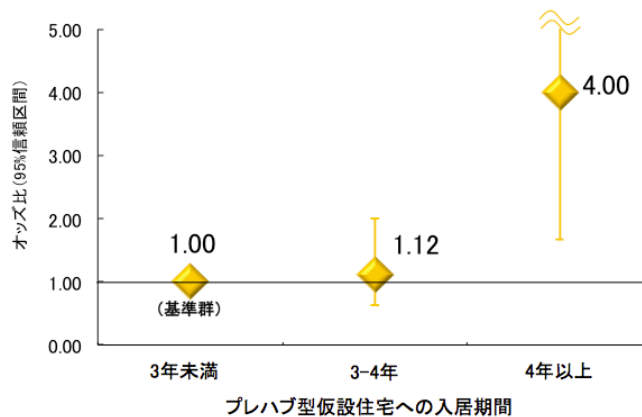


図2 プレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレス悪化

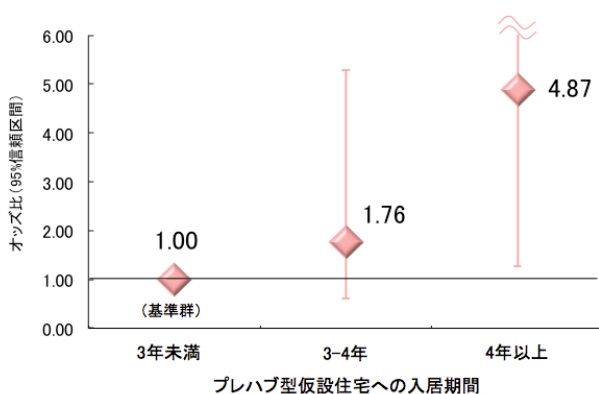
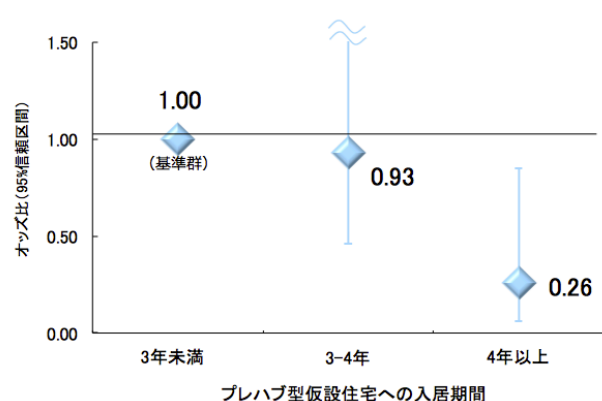


図3 プレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレス改善



研究のデータについて

東北大学地域保健支援センターでは、震災後から半年毎に被災者健康調査を実施し、生活環境や健康状態を追跡しています。本研究では、宮城県仙台市若林区（全てプレハブ型仮設住宅居住者）で2011年9月に実施した第1期調査に参加し、研究同意があり、心理的ストレス（K6）の質問に回答した434名のうち、2016年1月の第10期調査でもK6の回答が得られた284名について分析を行いました。

住居形態について

第1期から第10期調査において、各調査時点での住居形態を「震災前から同じ」、「プレハブ型仮設住宅」、「家族・親戚・友人宅」、「新居」、「みなし仮設」、「復興公営住宅」、「防災集団移転団地」、「その他」の中から選択していただきました。本研究では、第1期調査にプレハブ型仮設住宅に居住していた者を対象者としているため、第1期調査から連続して「プレハブ型仮設住宅」と回答した期間を「プレハブ型仮設住宅への入居期間」と定義しました。本研究では、プレハブ型仮設住宅への入居期間を「3年未満」、「3-4年」、「4年以上」の3グループに分けて分析を行いました。

心理的ストレス（K6）について

心理的苦痛はK6で調査しました。K6は「神経過敏に感じましたか」、「絶望的だと感じましたか」、「そわそわ、落ち着かなく感じましたか」、「気分が沈み込んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」、「何をするのも骨折りと感じましたか」、「自分は価値のない人間だと感じましたか」の6項目の質問で構成され、「全くない（0点）」・「少しだけ（1点）」・「ときどき（2点）」・「たいてい（3点）」・「いつも（4点）」を選択するものです（得点範囲：0-24点）。心理的ストレスの程度は、先行研究での報告を基に5点以上を「高い」、4点以下を「低い」と定義しました。

他のリスク要因の影響について

この研究では、プレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレスの両者に関連する要因の影響を考慮して結果を算出しています。具体的には、第1期調査時に回答された性別、年齢、第1期調査時点のK6得点、主観的経済状況、社会的つながりおよび主観的健康感について、多変量解析による調整を行いました。

研究の特徴と限界について

本研究の長所として、本研究はプレハブ型仮設住宅への入居期間と心理的ストレスとの関連性を縦断的に調査した最初の研究であることが挙げられます。一方、本研究の限界として以下のことが挙げられます。第1に、対象者数が十分に多いとは言えませんでした。第2に、プレハブ型仮設住宅からの転居日を把握できなかったため、正確な入居期間を把握することができませんでした。
